

勉強

君は学校の勉強が面白いですか。

「面白い」と答える人は、どちらかというと、成績のいい人かな。「面白くない」と答える人は、やっぱりあんまり成績がよくない人が多いかな。

成績が悪いから勉強が面白くないのか、勉強が面白くないから成績が悪いのか。でもいずれにせよ成績の良し悪しと勉強の本当の面白さとは、じつは別のことなんだ。このことがわかっていっていると、君は勉強するのが少しは面白くなるのじゃないかな。それで学校の成績が良くなるとは限らないけど、ある意味では、べつにそれでも構わないんだ。だって、人生、面白くなければつまらないじゃないか。

君が学校の勉強が面白くないのは、たぶん、なぜこんなことを勉強しなければならないのか、納得できないからだろう。こんなことが自分になんの関係があるんだってね。国語の文法、サ行下二段活用、そんなことを教わらなくなったって話是可以できるし、数学の計算、図形のあれこれ、買い物で支払いができるなら、そんなものできなくても構わないよね。理科や社会だって同じだ。二酸化ナトリウムの化学式や、外国の古い戦争の年号なんか、覚えたって、試験が終われば忘れちゃうわけだ。英語？話せれば楽しそうだけど、やっぱり文法が面倒だなあ。

おおかたこんなところだろうね。まあ確かに君が思う通り、なぜこんなことが自分に関係があるのか、疑問な部分は多いよね。でも、そのことに疑問を覚える君は、ひよつとしたら、そういう疑問を持たずに試験でいい点を取り、いい成績をとっている優等生よりも、勉強の本当をとらえているのかもしれないよ。

じつさい、なぜ勉強しなければならないかということを、改めて考えてみても、いい成績をとって、いい学校へ行くため、ということ以外、どうも理由は見つからない。じゃあなぜいい学校へ行かなければならないのか、と考えると、その方が将来いい生活ができるから、それが自分のためだ、と親が言うから。この理由が納得できない君なら、勉強が面白くないのは当然だ。いい生活をするのが人生の目的だなんて、やっぱり納得できないんじゃないか。いい生活をするために、つまらない勉強をしなきゃならないのなら、べつにいい生活なんかしなくてもいいや。

全くその通りだね。でも、ここは試しに考え方を変えてみよう。勉強するのは、いい学校へ行って、いい生活をするためではなくて、賢い人間になって、賢い人生を送るためだ。賢い人間になることこそが、人生の本当の目的だ。だからこそ、勉強することは自分のためになるんだと。

まだ納得できないね。あんなつまらない勉強で、自分が賢くなるなんてとても思えない。そう思うのは、まあ仕方ないんだ。今の学校の勉強の方法は、いい学校へ行くためのものであって、賢くなるためのものではないからだ。

「勉強ができる」ということと、「賢い」ということは、違うことだとわかるだろうか。君たちが普通、「あの人は勉強ができる」と言う時、たいていそれは「成績がいい」ということだね。試験でいい点をとって、いい成績をとっていると。

だけど、「賢い」というのは、そういうことじゃない。サ行下二段活用を言えなくても、ローマ帝国崩壊の年号を正確に知らなくても、そんなことは全然問題じゃない。「賢い」ということは、そういうこととは全然違うことなんだ。

たとえば、この場合なら、なぜ言葉というのはそんなふうを活用するものなのか、なぜ活用することによって葉の意味は変わるのか、そういう問いをもっていることだ。問いをもって、自分で考えていることだ。ある

いは、なぜローマ帝国は滅んだのか、滅ぶということは人々にとつてどういうことだったのか、そういう問いをもって、それを自分で考えていることだ。君は、授業で教わったことについて、自分で考えたことはありますか。

文法や年号を覚えて、試験でいい点をとることなんか、その意味では簡単だ。自分で考える必要がないからだ。だから、自分で考えずに覚えただけのことなんか、試験が終われば忘れちゃうんだ。それで賢くなっているわけがないじゃないか。だって忘れちゃうんだから。

自分で考えたこと、自分の頭を使って自分でしつかり考えたことというのは、決して忘れることがない。その人の血となり肉となり、本当の知識となつて、その人のものになるんだ。人間が賢くなるということは、こういうことだ。言葉はなぜ活用するのかを考えるということは、自分が普段使っているこの言葉について考えることだし、ローマ帝国の崩壊と人々について考えるということは、同じ人間としての自分の心や行為について考えることだ。考えるということは、必ず、自分のこととして考えるということだ。すべて自分に関係があることとして考えるということなんだ。

君が勉強が面白くないのは、それがなぜ自分に関係があるのかわからないからだつたね。だけど、この世界で自分に関係のないことなんか一つもない。すべて自分に関係のあることだと思つて、世界を見て、勉強するようにしてごらん。勉強するということの意味と面白さが、わかるようになるはずだ。

国語、数学、理解、社会、英語、どれも勉強することにはそれなりの意味がある。それぞれが、それぞれの仕方で、この世界のことを知ろうとして探求しているものだからだ。そして、世界に自分に関係のないことではないのだから、「世界を知る」ということは、「自分を知る」ことでこそ、人間は賢くなることができる。暗記するだけの勉強がつまらないのは、それで自分が賢くなつたと実感することができないからだ。

自分で考える勉強は面白い。自分の頭で考えるということは、本当に面白いことなんだ。

どうして面白いかというと、考えれば、知ることができるからだ。知るといふことの喜び、自分が賢くなることの実感、これが人を夢中にさせるんだね。

「知る」ということを、君はこれまで誤解していたはずだ。ローマ帝国の崩壊の年号を知っていると、「知っている」ということだと。

でも、本当に「知っている」ということは、そういうことじゃなかった。知っているということとは、「そのことがどういうことなのか」ということを、自分で考えて、そして、知っている、理解しているということなんだ。ローマの人々の気持ちはどんなだつたらう、皇帝はどう考えて次はどういう行動したらう、そういうことを、自分のこととして想像して、そして納得できているということなんだ。

むしろそれが本当にそうかどうか、正しい答えなのかはわからない。いや、正確には「正しい答え」なんでもないんだ。だって誰もそれを自分で体験したわけじゃないんだから。体験して知っているわけじゃないから、想像して考える、ここに考えることの面白さがある。考えるということは、正しい答えを求めるということとは違うんだ。

正しい答えもないのに、どうして考えるのか、考えられるのか、君は疑問に思うだらう。考えるということとは、正しい答えを出すことだとも誤解しているはずだからね。

なるほど、ある意味ではそれはその通りだ。答えがなければ、問はないからだ。だけど、「そのことはどういうことなのか」ということを知るために、どこまでも考えてゆくと、答えというものはないと知る、そういう問いがあることに、人は気がつくことになる。

たとえば、数学や理科の場合は、歴史と違って、「正しい答え」というのが必ずあるように思えるね。計

算すれば、答えは出るし、自然の法則は、そういうことに始めから決まっているからだ。

だけど、自然の法則がそういうことに決まっているのはどうしてなのか、という問いを立ててみるといい。君は、この問いには答えがないと気づくだろう。だからこそ人は、考えるんだ。答えがない問いが面白くて、考えるということを始めると。

でも、答えのない問いなんか、学校で考えているわけにはゆかない。先生だって、試験問題に、答えのない問いを出題するわけにはゆかない。「唯一の正しい答え」、それがあるから採点できる。だからローマ帝国崩壊の年号しか、学校では教えることをしないんだ。

こういう理由で、今の学校の勉強方法では、学んで知ることの本当の面白さは、なかなかわからない。だから君は、学校の勉強は学校の勉強として、自分一人で考えることの面白さを追求してゆくのがいいだろう。本を読むのが一番いい手だ。試験問題集なんかいくら数をこなしても、賢くなるのはあんまり期待できないね。

成績を気にせずに、自分の頭で考えよう、とは、あんまり大きな声ではいえないな。

まあ、要領だね。本当に大事なことは、試験や受験の先にこそあるということ、忘れないでいましょう。人生にとって本当に大事なことは何なのかということこそ、自分で考えて知らなければならぬ問いだ。「知る」ということが、自分が賢くなって、賢い人生を生きるために知ること、なければ、知るなんてことに、いったい何の意味があるだろう。

人類には「学問」という仕事分野がある。その歴史はとても古くて、ある意味では「有史」ということ自体がその始まりだと言っている。人間が動物から分かれて、「知性」つまり「知る、知ろうとする性質」をもった時から、それはもう始まっていたということだ。世界とは何か、宇宙とは何か、そこで自分が生きて死ぬとはどういうことなのか。

いつも知りたくて、考えていた。そうして文字を發明して、考えを記し、書物を作り、読んでまた考え、やがて科学というものの考えを見つけるに至った。自分と世界を知るために、ただ考えているだけじゃなくて、実験して観察して考える。方法は違うけど、目的は同じだ。自分は、世界はどうなっているかを知ることだ。人間は、いつもどうしても知りたいんだ。

君がもし、自分で考えることが好きで、知ることを楽しいと感じる人なら、大学へ行って学問をして、学者になるかもしれないね。それは素晴らしいことだ。人にはそれぞれ得意があるから、実験、観察することが好きなら科学、本を読んで想像することが好きなら文学や歴史、とりあえずそう大別されてはいるけれど、本当は関係ない。根っこは同じ、知りたいという気持ちだ。

学問をするということは、いつも知りたくて考えてきた人間の知性の営み、その長い歴史的営みに参加するということだ。これはずいぶん魅力的なことだと思わないか。科学も文学も、過去のどんな立派な人が残した仕事も、自分と同じようにしりたかった人間がしていた仕事だと思えば、何だかいとしくて懐かしいような感じになるはずだ。

今の学校でのつまらない勉強も、そういう素晴らしい学問の世界の言ったんだと、そのはじつこの部分に触れているのだと、こう思って、今はこの先に期待しよう。学問の世界は、世界つまり自分そのものとして、本当に奥が深いものですよ。

でも、勉強的なものはやっぱり苦手だ。そういう人もいるだろう。体を動かしたり手先を動かしたり、そういう方がずっと面白い。それはそれで素晴らしいことだ。そういう人はきつと、学問よりもスポーツや芸

術に才能があるんだろう。自分の好きな道に行くのが一番いい。でもどの道に行くのでも、それを本当に「知る」ためには、自分で考えて自分のものにする、それは同じだとわかるよね。

小論文問題文

「豚のピーちゃん」

ある小学校の6年生のクラスで、赤ん坊の豚を飼育することになりました。この取り組みは、この学校による食育の一環であり、最後はクラス全員で食することとなっています。この町は黒豚の産地で全国的に有名であり、養豚を営む家庭の生徒もいますが、一般的には養豚に関わる仕事をしていない家庭が多いです。

この飼育は、1年間この豚の日々の成長をクラスのみんなで観察し、病気の時は看病し、1日2回の食事を与えるなど生き物を飼育する経験を通じて「命の貴重さを知る」ことをテーマにした試みです。その成長記録は、観察日記に記し、卒業文集にまとめる予定であることを、豚を飼育する初日に先生から聞いています。

クラスのみんなで行う飼育は、初日から悪戦苦闘の連続です。なかなか言うことを聞かない豚を嫌がる生徒も多く、食事を与えても吐き出したりして、最初のうちは体重が増えずにクラスみんなが困っていました。それでも懸命に飼育方法を勉強して、献身的な飼育をするうちに徐々に食事もとれ、体重もみるみる増えていきました。いつしかクラスでは豚を「ピーちゃん」と呼び可愛がるようになり、クラスのアイドルの存在になったのです。それから10ヶ月経過しました。ピーちゃんは225gとなり大きく成長しました。その結果をクラスのみんなはとても喜びました。学校の先生たちもみんなの頑張りによく見ていたので、よかったねとたくさん声をかけてもらい、みんなはとても誇らしげであり、クラスのみんなの笑顔は最高に弾けていました。このときある生徒が「食べるのって、あと1週間後だったっけ?」と言いました。来週の水曜日には、豚を食肉センターに連れて行き、と殺して、食肉にし、この豚の飼育の最終目的であるクラスみんなで食することになっています。

1週間後、食肉センターに来たみんなは豚のピーちゃんが食肉になる過程を見学することになりました。

過程①豚のピーちゃんを電気棒でお尻を叩き、と殺場所へ連れて行きます。

もちろんですが、電気棒で叩くと痛いので、ピーピー鳴き叫んでいました。

過程②豚のピーちゃんの額を電気棒で叩き、気絶させます。気絶しただけでまだ生きています。

このとき一発で気絶できず、何度か電気棒で額を叩かれていましたが、3度目で気絶しました。

過程③気絶した豚のピーちゃんの頸動脈(首の血管)を切ります。このとき一気に血が吹き出ます。

豚のピーちゃんはまだピクピク動いていましたが、やがて絶命しました。

過程④血が出ている豚のピーちゃんを逆さ吊りにして、持ち上げます。体中から血を抜くためです。

血を完全に抜かなければ、食肉としての鮮度が落ちてしまうのです。

過程⑤逆さ吊りになっている豚の首を切り落とし、半分に切り裂くと、内臓が見えました。

このときにはもうただの肉の塊が吊るされていることになりました。

過程⑥降ろされた豚肉の塊が部位ごとに切り分けられていきます。

ロースとかヒレなどになり、残りの肉がミンチになって挽き肉となりました。

今、みんなの目の前に、きれいに切り分けられた豚肉が並んでいます。クラスの飼育した豚は、肉質がキメ細かく、品評会でも上位を狙えるくらいに美味しいそうなお肉でした。

(1) あなたがこの学校の生徒ならば、この学校の取り組みである「命の貴重さを知る」授業に対して、どのような意見を持ちますか。取り組み方法を含めて、賛成か反対かの立場を明確にし、その理由も答えて下さい